自称悪役令嬢な婚約者の観察記録。

登場人物紹介
クロ
バーティアのペットの黒狐。実はただの狐ではないようで――？
ノーチェス侯爵
バーティアの父。おバカな娘の奇行に悩まされつつも、かなり溺愛している。
ヒローニア
謎の小鳥を連れた男爵令嬢。バーティア曰く乙女ゲームの『ヒロイン』で、あの手この手を使ってセシルたち『攻略対象』に近づこうとする。
15歳
13歳
11歳
9歳
ゼノ
セシルの侍従。主の腹黒な本性を知っており、必死に諫めつつも半ば諦めている。
クールガン
バーティアの遠縁の少年。乙女ゲームの『攻略対象』の一人で、セシルの側近候補でもある。
バーティア
セシルの婚約者。乙女ゲームの『悪役令嬢』を自称している。悪役らしく振る舞おうとするものの、全然なりきれていない残念なご令嬢。
セシル
アルファスタ国の王太子。バーティア曰く『攻略対象』の一人らしい。容姿端麗・頭脳明晰で何でも簡単にできてしまうため、日常を退屈に感じている。

一　バーティア八歳

私の名前はセシル・グロー・アルファスタ。アルファスタ国第一王子にして王太子である。
十歳の冬、私は自身の婚約者である少女と初めて顔を合わせた。
バーティア・イビル・ノーチェス侯爵令嬢。
彼女は現宰相が当主を務めるノーチェス侯爵家の一人娘だ。
深紅の髪に琥珀色の瞳。色白でややふくよか……いや、ここは敢えてはっきり言おう。雪だるまのようにまるまると太った体が特徴の豚……間違えた、ご令嬢である。
アルファスタ王家と有力貴族の繋がりを強めるべく選ばれた、私の婚約者。彼女は、私より二つ年下の八歳だ。
彼女に初めて会ったその日。国王である私の父と、宰相である彼女の父が立会人となり、王宮でささやかな対面式が執り行われた。
「セシル殿下！　私は悪役令嬢ですの!!　私の役目はハルム学院入学後、殿下が出会われるヒロイ

ンとの仲を引き裂いて、最後は婚約破棄をされてギャフンと言わされることなんですわ!!」
対面式が終わってバーティア嬢と二人で庭に出た瞬間、彼女はそう言い放った。
ビシッと私の顔を指差してくる彼女。
うん。意味がわからないね。
バーティア嬢付きの侍女たちは顔を青くして……いや、訂正しよう。彼女がこうすることを予測していたのか、『あちゃあ。やっぱりやっちゃったか』的な顔をしている。
侍女たちの雰囲気からして、バーティア嬢のこの突飛な言動はきっと日常茶飯事なのだろう。
やらかしてしまったお嬢様に対する彼女たちの反応は、とても慣れている印象がある。引き攣った笑みを浮かべつつも受け流しているのだ。
多少のことでは動じませんといった雰囲気は、一朝一夕には出せないに違いない。……いいか悪いかは別として。
そんな周囲の反応を気にも留めず、バーティア嬢は話を続ける。
「けれど、お二人の仲を深めるためとはいえ無様な姿を晒すのは、侯爵令嬢としての私の信念に反しますわ。ですから私、決めましたの。一流の悪の華になってみせますわ!! 殿下はどうか、私がギャフンとされてもいいと思えるくらい、素敵な殿方になってくださいませ!!」
どうしようかな? 彼女の言っている意味が本当にわからないよ。
これって私が未熟な子供だから……ではなさそうだね。

私の侍従たちも、ポカンと口を開けて瞬きを繰り返しているし。
あぁ、でもひとまず……
「バーティア嬢、立ち話もなんだから、とりあえず座ってお茶でもしながら話さないかい?」
ニッコリと笑みを浮かべて彼女に手を差し出し、すでにお茶の準備が整っているテーブルへとバーティア嬢を誘うことにした。
私はまだ子供とはいえ、将来国を背負って立つ人間だからね。ちょっとやそっとのことで動じるわけにはいかない。
一息入れて、状況を整理するところから始めよう。
父上も、困った時こそ落ち着いて対処することが大切だって、いつも言っているし。
「……え、えぇ、そうですわね」
バーティア嬢は、目をパチパチとさせている。私の落ち着いた態度にやや気勢を削がれたのか、彼女は大人しくエスコートを受けてお茶の席に着いた。
そして、早速目の前のケーキにかぶりつく。
「セシル殿下はご年齢のわりに少し落ち着きすぎではありませんか? もしかして、転生者だったりします?」
バーティア嬢が、香りのいい紅茶をコクリと一口飲んでからそう言った。彼女はケーキのクリームを頬に付けたまま、何かを探るような視線を私に向けてくる。

……もしかして彼女は、私が王族であることを忘れているのだろうか？
昔からの友人というわけでもないのに、少々気を抜きすぎているように思う。
まぁ変に緊張して畏まられるよりは、面白くていいけどね。
「転生者というのがどういうものかはよくわからないけれど、私が年齢より落ち着いて見えるとすれば、きっと王族だからじゃないかな？　私たち王族はそういう風に振る舞えるよう、幼い頃から教育を受けているからね。当然だよ」
笑みを絶やさずバーティア嬢の質問に答えると、彼女はまんまるい顔をコテンと傾ける。
「そういうものなんですの？」
彼女はそう尋ね返しつつも、納得してくれたようだった。
しかし、そばに控えている私専属の侍従――ゼノは首をフルフルと振っている。
彼はいつも、『殿下は王族という点を差し引いても達観しすぎです。もう少し子供らしい遊びもいたしましょう！　歳相応の可愛らしさも大切だと思います!!』などと、口煩く言ってくるのだ。
彼の髪は落ち着いたモスグリーンで、瞳は私よりやや明るい青。
どことなく深い森の中をイメージさせるその容姿は、派手ではないけれどそれなりに整っており、穏やかな好青年に見える。
いつもビクビクしていて、奥さんがいれば尻に敷かれてそうな、気が弱い性格だ。そのくせ、私との付き合いが長いせいか、時々こうやって余計な反応を返してくることがある。

私はゼノの様子に気付いて苦笑しつつも、特に気にしないことにした。
周りの大人には、これと似た反応をされることがよくある。
ただ、多少子供らしさに欠けていたとしても、私の役目は王太子だ。王太子らしく振る舞えれば、それでいいだろう。
もちろん必要があれば、私だって無邪気な笑みの一つや二つ、浮かべることもあるしね。
「それじゃあ一息ついたところで、君がさっき言っていた『悪役令嬢』とか『ヒロイン』、『ギャフン』とやらについて、私にもわかるように説明してくれるかな？」
バーティア嬢が二つ目のケーキに手を伸ばしたところで、私は彼女に詳しい説明を求めた。
……どうでもいいけれど、バーティア嬢付きの侍女たちは彼女のことを放置しすぎじゃないだろうか？
王族の前でのマナーについても、食事の量についても。
「えぇ、もちろんですわ!!　殿下には私の話を理解していただいた上で、私を振るに相応しい方になっていただかなければならないのですから!!」
フォークをギュッと握りしめ、真剣な目で私を見てくるバーティア嬢。
いくら真面目な顔をしていても、口の周りにクリームが付いていては格好がつかない。けれどそんなことには、まったく気付いていないようだった。

……どうやら、私は今まで自分の理解力を過信していたらしい。
こう言ってはなんだが、自分は比較的頭のいい子供だと思っていた。
というのも、王立ハルム学院で習うレベルのことは習得済みだからだ。
ハルム学院は、このアルファスタ国でもっとも歴史が長く、数ある学校の中でも特に入るのが難しいとされている。貴族の中でも特に優秀な人間が集まるため、他の学校に比べて教育のレベルも高く、マナーにも厳しい。
そんなハルム学院で十四歳になる年から六年間かけて学ぶすべてのことが、十歳の私の頭には入っている。だからそれなりの頭脳はあると思ってたんだけど……
どうしたことだろう。
バーティア嬢が説明下手だということを差し引いても、彼女の言っていることがよくわからない。
「ですから、殿下は『運命の乙女』であるご令嬢と出会い、その天真爛漫さに興味を惹かれ、恋をするのです。そんな二人の様子を見た悪役令嬢の私は、嫉妬の鬼と化し、そのご令嬢をいじめまくります。それを知った殿下が激怒して、婚約破棄。芋づる式に我が家は破滅への道を歩むのです!!」
彼女が力説しているのは、これから起こる出来事らしい。
彼女は前世の記憶（？）を持っていて、当時好きだった、動く絵が一緒に見られる小説（？）のようなもの――『乙女ゲーム』とやらに私の未来が描かれていたというのだ。

『運命の乙女』？
『悪役令嬢』？
この私が、激怒して『婚約破棄』？
一体なんなのだろう、それは。
そもそも物事に執着しない私が激怒するという時点で、あまり現実味がない。
まだ他にも細かな設定（？）があるみたいだが、今日は大まかな話を聞くだけにした。
前世の彼女は『日本』という国で生まれ育ったそうだ。自分がいつ死んだかは思い出せないようだが、『乙女ゲーム』というものが好きで、やりまくっていたことははっきり覚えているらしい。
その『乙女ゲーム』の中に、私と『ヒロイン』が結ばれる『ルート』とやらがあったのだという。
私が『運命の乙女』である『ヒロイン』と共に数々の試練を乗り越え、バーティア嬢を『ギャフン』して幸せになる物語のようだ。しかし、その細かな内容については「お伝えしてシナリオが狂ったら困りますもの!!」と、詳しく教えてくれなかった。
徐々に知っていくのも一興かと思い、私はそれ以上追及するのはやめた。
大体、自分が恋愛ごとに浮かれて、政治的メリットの大きいこの婚約を破棄するとは思えない。
目の前のご令嬢が嫉妬の鬼とやらになるのも、今のところまったく想像できなかった。
現実味がないし突っ込みどころも多すぎて、少々頭が混乱してきている。これ以上別の情報を投げ込まれては、さすがの私も捌ききれない。

婚約者との顔合わせのためのお茶の時間は、そろそろ終わりを告げようとしていた。
あぁ、でも最後に確認しておきたいことがある。
「バーティア嬢、一つだけ質問してもいいかな？」
「一つと言わずいくつでも。五歳の時に記憶を取り戻してから、殿下とこの話ができる日を心待ちにしておりましたので!!」
若干前のめり気味に言われて、苦笑しそうになる。
正直、彼女に多少の妄想癖があろうと、未来を予言する力を持っていようと、私にはどうでもいいのだ。
問題なのは……
「君の言う『一流の悪の華』とは、どういうものなんだろうか？」
ここが一番重要だ。
仮にも彼女は、今日この日、正式に私の婚約者となった。
私の婚約者になるということは、未来の王妃になるということだ。
『ヒロイン』とかいうわけのわからない存在はどうでもいい。けれど、彼女の言う「悪の華」が王妃に相応しくないものであるのならば、早めに調きょ……いや、正しい道に目覚めてもらわなければならない。もしそれが無理そうであれば、父上に相談して見切りを付ける必要もあるだろう。
なんといっても、私は将来の王なのだから。

「そんなの決まっておりますわ！　強く、気高く、美しく！　誰に何を言われようと己の道を突き進む存在。たとえそれが破滅への序奏だとしても、躊躇うことなく歩き続ける!!　そんな女性に、私はなるのです!!」
「強く、気高く、美しく……ね」
この時、私はなんの気なしにバーティア嬢のふくよかな腹部を見ていた。
言いわけをさせてほしい。
彼女が自分の容姿をどのように捉えているのかは気になっていたから、まったく意識してなかった……とまでは言わない。だが、明確な意図を持って彼女を貶める気はなかった。
実際、このタイミングで腹部を見ているのはまずいと思った私は、すぐに視線を上げ、彼女の顔を見て笑みを浮かべた。
しかし、時すでに遅し。
バーティア嬢は私の視線の動きに気付いていた。
そして顔を真っ赤に染める。
「ち、違うのです！　バーティア・イビル・ノーチェス侯爵令嬢は、元々は噛ませ犬的な存在ですので、容姿は微妙なキャラなんですの」
「噛ませ犬？　それは……なんだか悲しい存在だね。君は本当にそれでいいの？」
「よ、よくありませんわ!!　それはゲームのバーティアの話で、私は……私は……ただのバーティ

ア・イビル・ノーチェス侯爵令嬢とは違いますの！　私は私なんですの！　自分の殻に閉じこもりがちだった前世の私の支えであり、癒しでもあったセシル殿下の幸せを、私は願っているのです！　だから、もっと崇高な……清く正しい悪の華になりますの!!」

テンパっているのかな？

清く正しい悪の華……って凄く矛盾している気がするんだけど、バーティア嬢はまったく気が付いていないようだ。

彼女は指先まで真っ赤に染めて、ガタンと音を立てて立ち上がった。

「で、殿下。私、自分を磨いて出直してまいりますわ!!　それでは失礼いたします！　ご機嫌よう！」

バーティア嬢は慌ただしくお辞儀をして、私が止める間もなく走り去った。

侍女たちも慌てて一礼すると、主人の後を追う。

私は彼女たちの姿が見えなくなるまで、呆然と見送っていた。

「……なんだったんだろう？」

「殿下、どうなさいますか？」

私の呟きに反応してゼノが尋ねてくる。

「何を」が抜けてはいるが、そこに入るのはきっと「彼女との婚約を」だろう。

王族の結婚には様々な利害関係が絡んでいるから、すぐにどうこうすることはできない。だけど、

今日の彼女の言動について父上に話せば、時間はかかっても婚約破棄できるかもしれない。

でも……

「彼女、面白いね。それに、貴族らしくないまっすぐな性格だから御しやすいだろう。……大きな害はなさそうだし、楽しそうだからしばらくは観察してみるよ」

なんだか久しぶりに愉快な気分だ。

別に彼女に惚れたわけではないけれど、なんて言うか……馬鹿な子ほど可愛い？　新しい玩具発見？　よくわからないが、今まで感じたことがないほどワクワクしている自分がいる。

基本的に、何ごとも一度やればできてしまう私にとって、世界は常につまらないものだ。

達成の喜びとやらもほとんど感じたことがなく、目に見える景色はいつもどこか色褪せていた。

でも、今日彼女に会って、私の世界は確実に明るくなった。

何が起こるかわからないという状況が、私を高揚させてくれる。

「ふふ……」

気付けば、自然と笑みが浮かんでいた。

私にとって笑顔は意識して作るものになりつつあるから、とても珍しいことだ。

「殿下、なんだか楽しそうですね」

ゼノが呆れ顔でそう言った。

「あぁ、この予測不能な感じは悪くないかなって思うよ」

「……それは結構ですが、もう少し子供らしい楽しみ方はできないんですか？」
「子供らしく無邪気に楽しんでいるじゃないか」
私がそう答えると、ゼノはわざとらしく肩をすくめて溜息をつく。
「……そうでした。殿下は子供らしさを、王妃様のお腹の中に置き忘れてこられたのでしたね。できないことを求めてすみません」
「君は相変わらず失礼なことを言う奴だね。まぁ、いいよ。私は今凄く機嫌がいいから聞き流してあげる」
「ありがとうございます」
ゼノは不服そうに頭を下げた。そんな彼から、視線をバーティア嬢の去った方向に向ける。
私の婚約者となった彼女は、一体私をどれだけ楽しませてくれるのだろうか？
「期待を裏切らないでね？」
小さな声でささやいた後、空を見上げて目を瞑った。

二　バーティア九歳

私が次にバーティア嬢と会えたのは、なんと対面式から一年も後のことだった。
仮にも彼女は私の婚約者だ。交流を深めようと何度かお茶に誘ってみたのだが、彼女は「病気療養中」ということで、ノーチェス領にある屋敷に引きこもってしまっていた。
宰相として王宮に出仕している彼女の父親――ダグラス・イビル・ノーチェス侯爵に彼女の様子を聞いたこともある。だがそのたびに、彼は苦虫を百匹噛み潰したような顔に無理やり笑みを貼り付けて『娘は実は（馬鹿という）不治の病でして』と言うのだ。
……読唇術を習得している私には、ノーチェス侯爵が小さく口パクした「馬鹿という」の部分も、しっかり伝わっているんだけどね。
大体、本当に不治の病だとしたら、私の婚約者でいることは難しい。
それくらい、王族である私には判断できるよ？
彼女が引きこもってしまったことに対して、多少『私のせいかな？』と心配になってもいた。そこで、彼女の領地での様子をとある人物――私はおつかいと呼んでいる――に調べてもらうことにしたのだ。

時々届く「おつかい」からの報告書は、つまらない日常を過ごす私の、一番の楽しみになった。
だから、バーティア嬢が少年のような格好をして、毎朝毎晩、屋敷周辺を走っていることも知ってるよ？
病気療養中のご令嬢が「あと二キロ～!!」とか叫びながら、汗だくで走れるわけないよね？
そんな彼女が遂に、私の前に姿を現した。
「お久しぶりですわ、セシル殿下！　私が誰だかわからないですって？　バーティア・イビル・ノーチェス。殿下の婚約者ですわよ？」
私の十一歳の誕生日の前日、私が人と会う時によく使う王宮の一室で、バーティア嬢はノーチェス侯爵と一緒に私を待っていた。彼女は私の姿を見た瞬間、満面の笑みで挨拶（？）をしてくる。
子供らしく可愛い反応ではあったけれど、貴族令嬢……それも王太子の婚約者の振る舞いとしてはアウトだろう。
それはそうと……随分見た目が変わったね。
一年ぶりに会ったバーティア嬢は、雪だるまのようにまんまるだった体型が嘘のように、ほっそりして綺麗になっていた。
「見違えましたか？　見違えましたでしょう!?　――痛っ！　何をなさいますの、お父様！」
「セシル殿下、馬鹿娘が失礼いたしました。教育をやり直してまいります」
父親から拳骨を落とされて涙目になっている彼女に、思わず苦笑する。

ちなみに、私の婚約者に拳骨を落とした侯爵の行動も問題ありだ。だけど私には、迫力満点の笑みを浮かべる彼に、それを指摘する勇気はない。
だからといって、このままバーティア嬢を連れ帰られて、また彼女に引きこもられても困る。
彼女は一年ぶりに会えた私の娯楽……婚約者なのだから。
「気にしないでください、ノーチェス侯爵。子供らしくて可愛いではないですか」
「セシル殿下は相変わらず子供らしくないですね」
ノーチェス侯爵は、遠慮なく失礼なことを言ってくる。だが、私はそんなことには動じない。
「よく言われます」
なるべく子供らしく見えるように心がけて微笑むと、ノーチェス侯爵もニッコリと笑みを浮かべる。
バーティア嬢は拳骨の落ちた頭を両手で押さえつつも、頬を赤らめてボーッと私の顔を見ていた。
自慢ではないけれど、私はこういう視線を女の子からよく向けられる。
家族や父の側近たちには「将来、女たらしにならないか心配だ」とか「あざとい」とけなされる。
反対に「王としては楽しみだ」と言われることも多いけど。
「で、殿下、もう一度言ってください……ませんか？」
急にもじもじし始めたバーティア嬢。
その言葉の意味がよくわからず、私は首を傾げる。すると、彼女は恥ずかしそうに口を開いた。

「か、可愛いって……」
……彼女の中では、同年代から言われた「子供らしくて可愛い」も褒め言葉に入るのかな？
もしかしたら、彼女の耳には変なフィルターがかかっているのかもしれない。
でも、頬を赤らめてもじもじと上目遣いに私を見る彼女は……まぁ、女の子として可愛いと言えなくもないかな？
「バーティア。殿下に頼まなくても、父様がいつも言っているじゃないか」
侯爵はバーティア嬢の反応にギョッとして、慌てて止めに入る。
確かに、王族に対して「可愛いと言って」と強請るのは、貴族令嬢としてあるまじき行為かもしれない。
でも……父親が「可愛い」って言ってるんだから婚約者に言ってもらうのは諦めなさいっていうのは、やや無理がある気がするんだけどな？
ノーチェス侯爵はバーティア嬢のほうを向き、諭すように言葉を付け加えた。
「見た目に騙されてはいけないよ。殿下はいつも笑顔だが、目が笑っていないだろう？　可愛いものを愛でる感情など持ち合わせていない、冷たいお方だ。たとえ『可愛い』と言ってくださっても、それは社交辞令以外の何ものでもないのだよ。私の『可愛い』のほうが、いっぱい愛情がこもっている。だから、それで我慢しなさい」
……バーティア嬢以上に失礼なことを言っている自覚はあるのかな、ノーチェス侯爵は。

「だって、お父様はいつも頭に『馬鹿な子ほど』って付けるではありませんか。あんまり嬉しくないですわ。それに……やっぱり美形に言われるのとは全然違うんですの！」
「バーティア……」
ノーチェス侯爵が、残念な子を見るような目をバーティア嬢に向ける。
そんな彼らに、私も残念な親子を見るような目を向けそうになって……どうにか笑顔で耐えた。
彼女の言う通り、「馬鹿な子ほど可愛い」は、私の「子供らしくて可愛い」以上に褒め言葉にならないと思いますよ、侯爵。
本人に直接言ったら、悪口と取られてもおかしくないレベルですからね？
「で、殿下。娘にはやはり再教育と親子の話し合いが必要なようですので、私たちはこれで……」
「大丈夫ですよ、ノーチェス侯爵。それも彼女の持ち味ですからね。愛らしいじゃないですか」
私は軽く首を横に振って、侯爵の言葉を遮った。
娘の再教育と称して私と彼女を引き離されては困る。
娘が王太子の前で粗相するのを防ぎたいのか、あるいは父親によくある「娘はやらん」精神に基づいた行動なのかはわからないけれど、そうはさせませんよ？
私は婚約者となかなか会えなくて退屈……寂しい思いをしてたんだからね。
それに、本当に彼女が私の婚約者――未来の国母に相応しいか、見定めないといけないんですから。

「「殿下……」」
バーティア嬢とノーチェス侯爵が、同時に私の名前を呼ぶ。
けれども、二人の声色は正反対だ。片方はどこか恍惚(こうこつ)とした声。もう片方は……申し訳なさそうな雰囲気を出してはいるものの、同時に舌打ちでもしそうな感じだった。
ノーチェス侯爵は、宰相(さいしょう)としてはそれなりに実力を発揮しているみたいだけど、プライベートでは顔色一つ上手く隠せない単純な性格らしい。
いや、これは意図的に隠していないのかな？
「ノーチェス侯爵は、この後父にお会いになる予定でしたね？　その間、彼女をお茶にお誘いしてもいいでしょうか？」
「駄目で……」
「はい、喜んで!!」
侯爵が反射的に断ろうとした瞬間、バーティア嬢がそれを遮(さえぎ)った。
ノーチェス侯爵……いくら顔に笑みを貼り付けたままとはいえ、今の舌打ち、しっかり聞こえましたからね？
「ありがとうございます。ついでに明日の打ち合わせもさせてくださいね」
ノーチェス侯爵の言葉は聞こえなかったふりをして、彼らにお礼を言う。
そこに「明日の打ち合わせ」という言葉を盛り込めば、侯爵も断ることはできないだろう。

明日は私の誕生日パーティーが開かれる。
私とバーティア嬢は、まだ社交界へのお披露目(ひろめ)はしていない。だから今まで、パーティーや祭典には父上たちのおまけとしてしか出席したことがない。けれどお披露目(ひろめ)を済ませれば、王太子として公(おおやけ)の場に出られるようになるので、パートナーが必要になる。
明日はその練習として、婚約者である彼女をパートナーとして同伴することになっている。
国内の諸侯が集まる公式なパーティーだけれど、私たちはまだ子供。多少の粗相(そそう)なら見逃してもらえる内に、そういう場に二人で出席することに、慣れさせておこうというのだ。
つまり王族の一員として振る舞うための予行演習といったところだね。
「おつかい」からの報告では、バーティア嬢は公(おおやけ)の場での振る舞い方を、それなりにマスターしているらしい。けれど、実際に公式な場に出るのは初めてのことだ。
私が彼女をフォローするためにも、事前の打ち合わせはしておいたほうがいいだろう。
お茶に誘いながら言外(げんがい)にそんな意味を匂わせれば、侯爵も下手に断ることができなくなる。
王族からの厚意なのだから、当然だ。
「では、僕らはここで失礼しますね」
「殿下もご存知の通りふつつかな、ふつつかな娘ですが、よろしくお願いいたします。お見苦しい点も多々あるかと思いますが、まだ幼(おさな)いのでどうか、どうか、ご容赦くださいませ」
つまり『駄目な子っていうのは知ってますよね？　それでもいいと言ったのは殿下ですよね？

だから多少馬鹿をやっても子供のしたことと思って目を瞑ってくださいね？』と言いたいのかな？
まぁ、面白ければいいよ。
「もちろんです。彼女は私の婚約者ですから。何かあればそれなりにフォローはさせていただきますので、ご安心を」
侯爵の言いたいこともちゃんと理解したよ、と伝えるべく、私は笑顔でしっかりと彼の目を見据え、うなずいてみせる。
しばらく不安そうにしていた侯爵だけれど、私の視線からきちんと意図を汲み取ったのだろう。何かを諦めたように、ふっと溜息をついて言った。
「優秀……いえ、天才と名高い殿下にそう言っていただければ安心ですね。……バーティア、セシル殿下はこう仰っているが、お前はお前なりに気を付けなさい」
「はい！　もちろんです、お父様！」
バーティア嬢が無駄に元気のいい返事をする。侯爵はそんな彼女のことを心配そうに見つつも、深々と頭を下げて去っていった。
侯爵の背中を見送った後、バーティア嬢に声をかける。
「さて、それではお茶にしようか。準備は済んでいるので、こちらへ」
「はい。ありがとうございます、殿下！」
私はニッコリと笑って、バーティア嬢をエスコートするために手を差し出す。すると彼女は、満

面の笑みでそれに自分の手を重ねた。
淑女の作法をしっかりふまえてはいるけれど、やはり元気がよすぎる。
そういえば、彼女は確か「強く、気高く、美しい悪の華」を目指してるんじゃなかったっけ？
確かに、前より痩せて美人に近付いてはいるけれど……性格や言動はどう考えても「悪の華」とは正反対の方向に向かっている気がする。彼女はそれでいいのかな？
そんなことを思いながら、バーティア嬢を来客用のティールームへ誘う。
部屋に入ると、お茶の準備を整えたゼノが、私たちに気付いてニコリと笑った。
「こちらへおかけください」
ゼノがバーティア嬢のために椅子を引く。彼女をそこに座らせ、私もその正面の席に着いた。
私たちが着席したのに合わせて、ゼノがお茶を淹れてくれる。
目の前に置かれたお茶とお菓子を、バーティア嬢はキラキラした瞳で見つめていた。私が『どうぞ』とすすめるのを、『待て』と命じられた犬のように待っている。
「コホンッ」
バーティア嬢の侍女の一人が咳払いした。
バーティア嬢はハッとして、「ダイエット……」と呟く。
その姿は、まるで耳を寝かせてしょんぼりした犬みたいだ。私は思わず苦笑を漏らす。
「こちらのケーキなら、糖分は控えめだよ？　私は甘いものが得意ではないから、特別に作っても

らっているんだ」
そう言って侍女に目配せし、私の前にあるケーキを一つ彼女のほうへ持っていかせる。甘さを抑えてあるので、比較的低カロリーのはずだ。
「糖分控えめ！　ケーキ！」
バーティア嬢は目の前に置かれたケーキを見て、再び目をキラキラさせる。しょんぼり寝ていた耳がピンと立ち、尻尾がブンブンと勢いよく振られる……幻覚が見えた気がした。
バーティア嬢……嬉しいのはわかったから、幼児化するのはやめようね？
子供の内は可愛いで済むけど、国母になった時に、それはアウトだから。周りに色々と付け込まれるよ。
まぁ、私の前でだけだったら、面白いから構わないけれどね。
「どうぞ召し上がれ」と私がすすめると、彼女はとても嬉しそうに、そして幸せを噛みしめるようにケーキを頬張った。
あまりにも美味しそうに食べるものだから、今日のケーキはそんなに特別なのかと思って、私も一口食べてみた。けれど、いつもと変わらない味だった。
口の中に広がった甘さを、紅茶で喉の奥に流し込んでから、さっきからずっと気になっていたことを尋ねてみる。
「ところでバーティア嬢、今日は随分変わった襟巻をしているね？」

黒く艶やかな毛並みの狐の襟巻。
室内で襟巻をするのもどうかと思うけれど、それ以上に気になることがある。
私の目の錯覚でなければ、それは「狐の毛皮」ではなく「狐」そのものだ。
……しかも、生きたままの。
「殿下はお目が高いですね!!　素敵な毛並みでしょう？」
ケーキから視線を上げた彼女が、満足げな笑みを浮かべる。
いや、確かに見事な毛並みではあるけれどね？　注目すべきはそこではないと思うよ？
彼女の小さい肩にはどうやっても乗らないはずのそれが、まるで浮いているかのように彼女の首に巻き付いている。
その異様さに、彼女は気付いていない様子だ。
チラリと背後に視線を向けると、ゼノがいつも通りの穏やかな笑みを維持しようと頑張っていた。けれど残念なことに、口元がピクピクと引き攣っている。
「確かに見事な毛並みだね。ただ、私にはそれがさっきから、微妙に動いているように見えるのだけど？」
「あ、バレてしまいましたか？　おかしいな。お父様たちにはバレなかったのに」
彼女付きの侍女たちは、私たちが話していることの意味がわからないようで、首を傾げている。
けれど、筆頭侍女らしい一人だけは、さっと視線を逸らした。

うん。きっと彼女は気付いてるね。
その上で、これまで放置していたんだろう。
筆頭侍女の視線が、恐る恐る私のほうに戻された。それには申し訳なさと共に、後はお任せしましたと丸投げするメッセージが込められている気がする。
「まぁ、面白いから今はそのままでいいかな。ただ、明日の誕生日パーティーにはしてこないようにね？　襟巻をしていることを、よく思わない人もいるだろうから。後で父上に許可をもらっておくから、今度からは『襟巻』ではなく『狐』として連れておいで」
「確かに、室内のパーティーで襟巻は変ですわよね。わかりましたわ！　それに……ペットとして連れてこられるのは、正直ありがたいですわ。この子、拾ってからずっと、私のそばを離れなくって……。今日も、どうしても家に置いてくることができなくて、こうして襟巻に擬態させて連れてきましたの」
……擬態できてないけどね？
というか、拾ってきたんだ……狐を。
「どこで拾ってきたの？　ノーチェス侯爵は知ってる？　何か言ってなかった？」
「この子を拾ったのは、領地の屋敷のそばにある森です。変わった形の石が置いてある場所にいましたの。毎日ランニング……散歩をする時にその石の前を通っていたのですけれど、いつもそこにちょこんと座って私のほうを見ていまして。石の形が鳥居に似ていたので、この子がお稲荷様のよ

うに見えたんですの。それで、前世の記憶をフル活用していなり寿司を作って、試しにお供えしてみたら、気に入ったらしくてついてきてしまいましたの」
『鳥居』？
『お稲荷様』？
『いなり寿司』？
バーティア嬢の話によると、前世の彼女が生きていた世界では狐の姿をした神様――『お稲荷様』がいて、それを祭る『神社』という神殿のような場所が、彼女の家のすぐそばにあったらしい。
「前世では小さい頃、お母さんに怒られそうになると、よく神社に逃げ込んでいましたの。でも、なぜかすぐに見つかってしまって……」
いや、いつも同じ場所に逃げ込んでいたら、見つかるのは当たり前だよね？
「何回もそこに隠れている内に、神主のお爺ちゃんと、その奥さんのお婆ちゃんと仲良くなったんですの。隠れている時には、お供え用に作ったいなり寿司の余りをご馳走になりましたわ！　たまにお手伝いして、一緒に作ることもありましたのよ？」
それ、途中から隠れる気なくなってるよね？
『神社』とかいうところで、普通にくつろいでいただけだよね？
「そういえば、その神社は不思議な噂のあるところでしたわ。お稲荷様にいなり寿司をお供えする座敷童が現れるらしくて、それを見るといいことが起こるというジンクスがありましたの。私も何

度かお手伝いでいなり寿司をお供えに行っていたんですけど、残念ながら一度も見られませんでしたわ」

昔を思い起こすように遠くを見つめ、懐かしむバーティア嬢。

でも私には、とても疑問に感じる点がある。

「ねぇ、バーティア嬢。君が前世で『いなり寿司』とやらをお供えしに行った時、周りの人に変わった様子はなかった？」

「変わった様子？　特に……あ、そういえば、知らない人が満面の笑みで近寄ってきてお菓子をくださったり、私を見てガッツポーズをしたりしてましたわ」

「そっか……」

どうやら私の婚約者は、『悪役令嬢』だけでなく、『座敷童』とかいうものも兼任しているらしい。『座敷童』がどういう存在なのかはよくわからないけれど、多分ラッキーアイテムみたいなものなんだと思う。

見るだけでいいことが起こるんなら……バーティア嬢が彼女の狐に餌をあげているところを、今度見せてもらおうかな？

前世のジンクスとやらが本当かどうか、検証してみるのも楽しそうだ。

「じゃあ君はその頃のことが懐かしくなって、その狐に『いなり寿司』を作ってあげたら、懐かれたということだね？」

「そうですわ！　美味しそうに食べてくれましたわ」

彼女は満面の笑みでうなずいた。

「最初は悪役令嬢らしく毛皮の襟巻にでもしようかと思ったのですけど、凄く可愛くて……それに優しいんですの。帰る途中で転んでしまった私の傷を、舐めてくれたんですのよ。それでついうっかり名前を付けてしまったら、情が湧いて……。このまま巻いたほうがあったかいし、それでもいいかと思いましたの。ちなみにこの子の名前は、クロですわ！」

彼女はそう言いながら、首に巻き付いている狐の手触りを楽しむように、ふんわりとした黒い尻尾を一撫でした。そして満足そうに「ほぅ」と息を吐いている。

う～ん……なんでそこで、「それでもいいか」と思っちゃったんだろうね？

生きた動物と毛皮は、まったく別物だよね？

「それでお父様に見せて、飼いたいと言いましたの。そうしたら真っ青な顔で、拾った場所に戻してこいと怒られてしまって……。でも、私の傷を舐めてくれた話をしたり、もう名前も付けたのだと訴えたりしたら、飼うことを認めてくださいましたの。それからは、『大切にしなさい』と口煩く言われてますわ。……お父様は私がペットを無下にするとでもお思いなのかしら？」

傷……つまり血を舐めさせて、名前を付けた後じゃ仕方ないね。

きっとノーチェス侯爵は、「大切にしなさい」としか言えなかったと思うよ？

今の話を総合して考えると、この黒狐はただの狐ではない。

自分のしたことの意味をまったく理解していない婚約者殿と、反対にすべてわかった上で素知らぬ顔をしている黒狐を見比べる。
バーティア嬢はニッコリ笑いかけてくるのみ。
黒狐――クロは、私の笑顔の中に少しだけ混ざった非難の色を的確に感じ取った様子で、『何よ、文句ある？』とでも言うように、大きく尻尾を振ってみせた。
まぁ正直なところ、クロ自身に種明かしをする気がないなら、私も様子を見てもいいかなと思っている。
きっと真実を教えないほうが、バーティア嬢は面白いことをしてくれるだろう。
それならクロに便乗して、もう少し現状を楽しませてもらおうかな。
「そうか。それはよかったね。私もその子は大切にしたほうがいいと思うよ。……後々のために」
「はい！　大切にしますわ!!」
屈託なく笑った彼女に対し、私は意味深な笑みを浮かべる。
私のうしろでゼノが「殿下も大切にしてください」と呟いていたけれど、スルーしておく。
大切にする方法は人それぞれなんだよ、ゼノ。
「さて、疑問は解消できたし、明日の話をしようか」
「お任せください！　一流の悪役令嬢らしく気高く殿下のパートナー役を務めてみせますわ!!」
バーティア嬢は自信満々に胸を張った。

……なんでかな。頼もしいはずなのに、不安になったよ。
ひとまず、釘だけはしっかり刺しておこう。
「それは心強いね。……ただこれからは、その『悪役令嬢』云々に関しては、私と君だけの秘密にしておいたほうがいいと思う。もちろん、君の言う『前世』の記憶のこともね」
「なぜですの？」
少し吊り上がった大きな目がパチパチと瞬きを繰り返し、私に答えを求める。
「これから私たちが出ていく社交界というのは、何が仇になるかわからない世界だからね。立派な悪の華になりたいのであれば、そういった特殊な事情は隠しておいたほうがいい。ほら、隙だらけの悪の華なんて、いかにも下っ端っぽいだろう？」
「な、なるほど！　確かにそうですわね！　隙を見せずに相手を蹴落としていくのが一流。口で色々言って墓穴を掘るのは三流ですわよね」
バーティア嬢は首を大きく縦に振った。
「……わかりましたわ！　私はゲームのバーティアとは違って、美しく気高い悪の華になるんですもの。余計なことは言わず、意味深に微笑んでみせますわ!!」
「……ありがとう。わかってくれて嬉しいよ」
理解の仕方が微妙にズレている気がするけど……まぁ、何か起きそうなら私がフォローすればいいし、しばらくは様子を見ようかな？

「ところで、明日のスケジュールについてはノーチェス侯爵から聞いている？」
「ええ、聞いておりますわ。セシル殿下と一緒に入場して、ファーストダンスのお相手を務めさせていただけばよろしいのですわよね？」
「うん。大体はそんな感じかな。ひとまずそれだけ押さえておいてくれれば大丈夫だと思うよ。あ、でも、もし何か困ったり迷ったりしたことがあったら、必ず私に聞いてね？　自己判断はしないこと。いいね？」
「その時は殿下がフォローしてくださいますの？」
バーティア嬢が期待のこもった目で私を見つめてくる。
「ああ。私は君の婚約者だからね。できる限りのことはさせてもらうつもりだよ」
「婚約者……いい響きですわね。あぁ、でもわかっておりますわよ？　私はちゃんと自分の役目をまっとういたしますから！　見事にギャフンとされますから！」
バーティア嬢は言葉の途中でしょんぼりした後、気合いを入れるように拳を握った。
「婚約者としての役目、大変だと思うけど頑張ってね」
「ええ、頑張りますわ!!」
彼女は……やっぱり何かがズレている気がする。でも、そのズレが面白いから敢えて訂正はしない。私はニッコリと笑みを浮かべるだけにとどめた。
「十一歳の誕生日を君と一緒に迎えられることを、嬉しく思うよ」

「私も殿下の十一歳の誕生日をお祝いできて嬉し……十一歳？　殿下、十一歳になられますの？」
バーティア嬢が急に表情を硬くした。
「ん？　そうだよ？　知らなかったの？」
「いえ、知っておりました。ただ……殿下が明日で十一歳……。私はつい先日の誕生日で九歳になりましたわ。ということは、次の誕生日で私は十歳に……」
バーティア嬢はブツブツ呟きながら、徐々にその顔を青くする。
それと同時に、彼女の琥珀色の瞳には涙が溜まって……
「で、殿下、お母様がぁぁぁぁ!!」
遂に彼女の目から涙の雫が零れ、ボロボロと泣き始めてしまった。
え？　なんだろう？　これは私が原因なのかな？
でも、彼女は『お母様が』って言っていたし。
どういうことだろう？　意味がわからない。
急に泣き出したバーティア嬢を見て、さすがの侍女たちも慌てだす。彼女たちはハンカチでバーティア嬢の顔を拭こうとして……しかし、そっとテーブルにハンカチを置いてうしろに下がった。
……『お任せします』的な視線を私に送るのはやめてくれるかな？
私は十歳の……まぁ明日で十一歳になるけれど、まだ子供だし、万能なわけじゃないんだよ？
それに、彼女は君たちの主だろう？

フォローも仕事の内なはず……わかったよ。そんな縋るような目で見ないでくれ。できる限りのことはするから。

私は無言の攻防戦に負け、渋々バーティア嬢に話しかけた。

「どうしたの？　バーティア嬢。私にもわかるように教えてくれるかな？　私で力になれることなら協力するから」

「で、殿下ぁぁぁ」

私の言葉を聞いて、バーティア嬢の涙はさらに勢いを増した。彼女は嗚咽混じりに話し始める。

聞き取りにくいそれに根気強く耳を傾けた結果……さすがの私も愕然としてしまった。

バーティア嬢によると、例の『ゲーム』の設定では、彼女が十歳の誕生日を迎える直前に、母親が死んでしまうらしい。

しかも恐ろしいことにその原因は、母親が亡くなる三ヶ月前から王都で流行り出した伝染病。

それは新種の……いや、正確にはある伝染病の一種が進化したものらしく、治療薬が見つかるまでに一ヶ月かかったそうだ。

しかしその治療薬に必要な薬草の一つが、手に入りにくいものだったという。育てるのが難しい上に、あまり使われないものだったため、栽培されている量が少なかったらしい。

しかも、その薬草が採れるのは春。伝染病が流行ったのは夏なので、この国には生えているものがなく、他国から取り寄せるにしても時間がかかってしまう。結果、病に罹った人のほとんどが命を落とすことになったという。

「お母様が病に罹った際、お父様は必死で薬草――ルオナ草を探しました。でも手に入れることができず……。無理を承知で、王家が備蓄している分を分けてほしいと陛下に頼むのですが、譲ってはもらえないんですわ。そしてお母様はそのまま死んでしまうんですの。陛下のお気持ちはわかります。他の臣下やその家族たちも多く病に罹っている中、一人だけを優遇することはできませんもの。それに、セシル殿下の弟君もその病に罹っておりましたから、もしものことを考えると譲るわけにはいかなかったのですわ」

涙は止まっていないけど、少しは落ち着いてきたらしい彼女が、辛そうにうつむく。

「お母様の死を機に、お父様は人が変わったようになってしまいますの。頭では仕方のないことだと理解していても、納得しきれない部分があったんだと思います。その心の闇につけ込む人たちもいて……徐々に悪の道へ進んでしまうのですわ」

そんな彼女の話を聞いて思った。

バーティア嬢の次の誕生日は、来年の晩秋だ。一年の猶予があるなら、今からその薬草を用意しておけばいいのでは？　と。

病が流行る時期に薬草が採れないというのなら、前もって採取しておけばいい。

今から動けば、彼女の母親だけでなく多くの国民を救える。

まぁ、彼女の話す未来が真実ならば……だけどね。

「ねぇ、バーティア嬢。君が話しているのは、未来のことなのだろう？　だったら、あらかじめ薬を用意すれば母君は助かるのでは？」
「で、殿下。でも、それではシナリオが……」
「シナリオ？　それと母君、どちらが大切なの？」
「もちろん、お母様ですわ！　でも……でも……」
バーティア嬢は「強制力が……」とか「シナリオが狂ってしまったら……」とか、よくわからないことを言っている。
「困ったことになったら、どうすればいいか一緒に考えよう」
動揺している彼女を慰め、優しく諭す。
バーティア嬢は不安そうな表情をした。けれど、泣いていても何も変わらないことに気付いたのか、コックリと大きくうなずく。そして涙を拭き、ケーキを食べ始めた。
黙々とケーキを口に運びながら、必死に何かを考えているようだ。
私は何も言わずに、その様子をじっと眺めることにする。
そうしている内に、ノーチェス侯爵が彼女を迎えに来た。
「バーティアの相手をしてくださってありがとうございました、殿下。さあバーティア、もう帰るよ」
きっと相当急いで戻ってきたのだろう。少し息が切れている。

そんなにバーティア嬢が心配だったのか？
傍らに立った侯爵を見て、バーティア嬢は何かを決意するようにぐっと拳を握った。
「殿下、申し訳ありません。私……家の没落はまだしも、お母様のことは譲れませんわ。もしシナリオが変わったらごめんなさい。なんとか補正するので、許してくださいませ」
……彼女はなぜ、そこまで『シナリオ』とかいうやつにこだわるんだろう？
それに没落なんて不穏な言葉を急に聞かされたから、ノーチェス侯爵が驚いて固まってしまっているよ？
まぁ面白そうだからいいかな。
「大丈夫だよ。私も協力するから」
安心させるように微笑むと、彼女はちょっとだけ笑って頭を下げる。
「よろしくお願いします」
そう言って、彼女は席を立った。
その隣でノーチェス侯爵が「没落とはどういうことですか？　殿下が当家の没落に協力するわけではないですよね？　ね？」と何度も尋ねてくる。私はニッコリと無言で微笑んでおいた。
侯爵が顔を引き攣らせながら、先に部屋を出ようとしているバーティア嬢を追いかける。
「じゃあ、私も父上のところに行こうかな？」
「陛下のところへですか？」

私の傍らに控えていたゼノが尋ねてくる。
「そうだよ。明日は私の誕生日だからね。父上はこの時期になるといつも『何も強請らないから何をやればいいかわからん』って頭を抱えているだろう？　そんな父上に、温室の使用許可とルオナ草の苗を強請ろうと思ってね」
もし彼女の言う通りのことが起こるとすれば、今から備えておくに越したことはない。
彼女の話す未来が本当かどうかはわからないけれど、彼女の話に付き合うのも、栽培が難しいという薬草の栽培に挑戦してみるのも楽しそうだ。
それでもし助かる人が出れば、王太子として嬉しくはあるからね。
仮にその未来が来なくても……まぁ、誕生日プレゼント代わりに楽しませてもらったと思えば、それでいいか。
笑みを浮かべた私に、ゼノが話しかけてくる。
「陛下はすでにプレゼントを用意されているのでは？」
「候補はいくつか用意しているようだけど、まだ絞りきれてないみたいだよ。今年はサプライズにしたいらしく、どれがいいか私には聞けなくて困ってるみたいだ」
「サプライズなのに、もうそこまでご存知なんですね」
ゼノが溜息をついている。
「ん？　よくわかんないなぁ。どういうこと？」

「いえ、なんでもございません」
「そう？　よかった」
笑顔で首を傾げてみると、「この腹黒い王子、嫌だ」とゼノが頭を抱えた。
そんな彼の態度は無視して、私は意気揚々と父上のもとへ向かう。
「行くよ、ゼノ」
薬草学に興味が湧いたと言えば、父上は疑うことなく色々用意してくれるだろう。
やることがいっぱいでなんだか楽しいな。こんな風に感じるのは、バーティア嬢に初めて会った時以来だと思う。
これも彼女のおかげだ。感謝しないとね。

三　バーティア十歳

「お久しぶりです、セシル殿下。ようこそおいでくださいました」
「久しぶりだね、バーティア嬢。お招きありがとう」
今日はバーティア嬢の十歳の誕生日。
彼女の家族と極々親しい人たちのみを集めた、パーティーが開かれる予定だ。
私は彼女の婚約者としてエスコート役を買って出たから、パーティーの開始時間よりも少し早めにノーチェス邸を訪れた。
いつもバーティア嬢に付いている侍女がやってきて、私とゼノを応接室に案内してくれる。バーティア嬢はすでに準備を整え、ソファーに座って待っていた。
私にしては珍しく、色々と忙しくて会うのが三ヶ月ぶりになってしまった。
久しぶりに会ったバーティア嬢は……少しやつれている。
「どうしたの？　体調でも悪いのかい？」
十歳の少女が身に着けるにしてはやや大人びた、くすんだ金色のドレスをまとった彼女。そのドレスの色は、よくミルクティーのようだと言われる私の髪の色に似ている。

バーティア嬢は華やかな装いに対して表情だけが冴えず、どこか疲れたような雰囲気を漂わせていた。
そのくせ瞳だけは鋭く光り、恨めしそうに私を睨みつけてくる。
「殿下、酷いですわ!!」
「ん？」
彼女の口から恨み言が飛び出したので、私は少々面食らった。
一応、私は王太子だ。こんな失礼なことを私に言えば、周りの大人たちは真っ青になるところなんだけど……彼女の侍女たちは慣れたもので、眉一つ動かさずにお茶の用意をする。
黒狐もどきはバーティア嬢の膝の上で丸くなり、尻尾をゆっくりと左右に揺らしていた。
私は彼女の向かいのソファーに腰かける。
「バーティア嬢。君のその愛らしい顔をゆがませるようなことを、私はしてしまったのかな？」
首を傾げて尋ねると、彼女は「もう！　もう！　もう！」と叫び声を上げ、クッションを両手で掴んでソファーに叩き付け始めた。
非常にわかりやすい上に他人を傷付けない、理想的な癇癪の起こし方だ。
……黒狐もどきにとっては、いい迷惑のようだが。
バーティア嬢の興奮が収まるのを、紅茶を飲みながら待っていると、ほんの三十秒ほどで落ち着いたらしい。

「……コホンッ。失礼しました」
彼女は気まずそうにクッションを元の位置に戻し、私に向き直った。
「で、でも、殿下もいけないのです。私、お約束通り殿下以外には前世のことを話さないようにしていますのよ？　だから、以前お話ししたお母様の件も、ご相談できる相手は殿下しかいませんの！　なのに、三ヶ月もお会いできないなんて!!　今日はもう私の十歳の誕生日ですのよ!?　本来であればお母様は亡くなっているはずですわ！　お手紙だっていっぱい書きましたのに、いつも『大丈夫』としか返事をくださらないし、私、どうしたらいいか……」
そのうち彼女はポロポロと泣き出してしまった。
これにはさすがの私も少々焦る。
音を立てないように気を付けて紅茶をテーブルに戻し、彼女の隣に席を移して、優しく背中に手を添えた。
未婚の男女としてはやや距離が近すぎる気もするが、婚約者同士なのだから問題はないだろう。
そんなことより、今は彼女を慰めることが先決だ。
ゼノとバーティア嬢の侍女たちに、視線で部屋から出るよう告げた。
侍女たちは少し躊躇いつつも、空気を読んで隣にある使用人の控え室に移動する。
婚約者とはいえ、未婚の男女を部屋に二人きりにはできないため、扉は開けっ放しになっていた。けれど、二人でゆっくり話すには十分だ。

「バーティア嬢、ごめんね？　君がそこまで思い詰めているとは思っていなくて。本当に大丈夫だから、そう手紙に書いたんだ。ただ、言葉が足りなかったかもしれない。事後処理やら副産物の利用方法の考案やら、隠蔽工作やらで少々忙しくてね。あと、君への誕生日プレゼントを作るのにも時間がかかってしまって……」
彼女が手紙で訴えてくる問題は、私がすでに処理済みのことばかりで、「大丈夫」としか言いようがなかった。だけど……この様子だと、相当心配させてしまったようだ。
大丈夫だと答えているのに周りを不安にさせてしまうことは、今までにも何度かあった。
私には大丈夫な未来が見えていても、他の人には同じものが見えていないせいで、そういうことが起こるようだ。
常に状況が正しく理解できている私は、いつも説明を省略してしまいがちなのだろう。
いくつかある情報を組み合わせて推測すれば、簡単にわかることだと思うんだけど……どうやら相手によってはそうじゃない場合もあるらしい。
これらは私の悪い癖みたいだ。
気を付けないといけないな。
「何が大丈夫なんですの!?　折角シナリオを変えるなら少しでも多くの人を助けたいと思って、私もできる限りルオナ草を手に入れましたわ。だけど、量は全然足りてませんのよ!?　……保存が上手くできなくて薬草として使えないものも多いですし……。かと思えば、病はなぜか流行っていな

くて、すでに亡くなっているはずのお母様もピンピンしてますの。私、何が何やら……もうどうすればいいのかわかりませんわ!!」
バーティア嬢が涙を溢れさせながら訴えてくる。
「あぁ、ほら、バーティア嬢。そんなに泣かないで。とにかく大丈夫だから」
「大丈夫じゃありませんわ!!」
「大丈夫だよ。ちゃんと君の言った通り、伝染病は流行ったんだ。……ただ、君が事前に情報をくれたおかげで、死者や重症者がほとんど出ずに済んだだけだよ。君が教えてくれた情報を元に、それがどんな病なのかを推測して薬を作ったんだ。いつどこで病が流行り出すのかも予想できたから、流行り始めた時点で患者たちを隔離して、すぐに治療したよ」
「やっぱり病は流行って……。薬を作って、患者たちを隔離して治療なんて、そんな大丈夫なわけが……え？　薬？　流行り始めに隔離？　治療？」
バーティア嬢が目を白黒させている。
「そうだよ。だから、もう伝染病は沈静化してるし、君の母上が感染する可能性も低い。……あ、これが薬だよ。もしものことがあるといけないと思って、一応持ってきたんだ」
そう言って、彼女の手に小瓶を握らせた。
「薬？　え？　あれ？　え？　ちょっと、意味が……」
「だから大丈夫だって言っただろう？　これでもう伝染病が流行ることも、君の母上が亡くなるこ

ともないから」
「は？　……えぇぇぇぇぇぇぇ!?」
バーティア嬢が、涙をいっぱい溜めた目を大きく見開いて叫んだ。
「ちょ、ちょっと、殿下！　どういうことですの!?　説明してくださいませ！」
驚いたような、焦ったような様子で、私の肩を掴んで激しく前後に揺さぶる。
……こんな扱いを受けたのは初めてだ。
頭がクラクラしてくるし、あんまり面白い体験ではないな。
「わかったから、ひとまず落ち着こうか？」
彼女の両手首を掴み、ニッコリ笑ってやめさせる。
「これが落ち着いてられますか！　早く説明してくださいませ！」
噛みつかんばかりの勢いで詰め寄ってくる彼女に、やれやれと思いながら、事の顛末を説明する。
バーティア嬢から伝染病の話を聞いた後、私は父上に頼んで温室の使用許可とルオナ草の苗をもらった。
難しいとされている栽培に挑戦するためだ。
まずはルオナ草の生育条件や特性、栽培方法が載っている本を読んで基本的な情報を得た。それを元に『こうしたほうがいいんじゃないかな？』と思ってちょっと手を加えてみたら……思いの外よく育ったのだ。

あまりにもあっさり栽培に成功してしまったため、次は薬も作ってみようと、父に頼んで薬学や医学の先生を雇ってもらった。そして彼らの授業を受けつつ、王宮の書庫でその手の本を読み漁った。

少しでも予測の精度が上がるように、バーティア嬢からは母親が亡くなるまでの経過や、病の特徴など、わかる限りのことを話してもらった。その伝染病は、現存する病が進化したものだという。

……彼女は『どうしよう』と相談しただけで、私がここまで本格的に動いているとは、考えていないようだったけど。

彼女から聞いた病の症状や、今まで流行ったことのある伝染病の発生傾向、今年の気候。色々なことを考慮に入れて検討した結果、私は一つの伝染病へと辿り着いた。

その伝染病が進化した新種だと仮定し、必要になるのがルオナ草だということから、試行錯誤して薬を作ってみた。

ある程度条件が限られているので、莫大な可能性の中から一つの答えを導きだすことよりは容易く、これまたあっさりと解に辿り着けた。

まぁ、実際にその解が合っているかは、事が起きてからでないと確認のしようがなかったけど。

とにかく、多少の時間を要したものの、ここまではなんとか順調だったのだ。

……そう、ここまでは。

病の正体や薬の作り方はわかったものの、それはあくまでバーティア嬢の話を信じるという大前提があってこそ活用できるものだ。

私は自分の好奇心に従い、役に立たなくてもまぁいいかという思いで取り組んでいた。だが、もし本気で病の流行に備えるのであれば、周りの大人を動かさなければならない。

とはいえバーティア嬢の前世の知識について話せない以上、彼らを説得するための材料はあまりに少なく、根拠も弱すぎる。

だから、苦肉の策として「偶然」を作るためにこんな台本を用意した。

私はある伝染病に「たまたま」興味を示し、それについて研究している医師を師として王宮に招く。

私たちはその伝染病について議論を交わし、それが形を変えて新種の病になる可能性について「たまたま」話し合う。さらに、その場合を想定した対処法も検討する。

それとは別に、その時私が「たまたま」栽培にはまっていた、ルオナ草の効能やその応用についても熱く語ってみる――

この筋書き通りに事を運ぶべく、一人の医師を招いた。彼の専門分野は、件の病の元となる伝染病だ。

王太子という私の立場もあってか、医師は興味深そうに話を聞き、色々と意見してくれた。

だが、そこからがなかなか進まなかったのだ。

新種の伝染病が発生した時、その対処法をルオナ草の応用と結びつけられるよう彼を誘導する作

業が、思いの外難航したのだ。
本人に気付かれないで、人を自分の思う方向へ導くことの難しさを痛感した。
『なぜこんな簡単なことに気付けないんだろう』と何度やきもきしたかわからない。
それでも医師とのやり取りを繰り返した結果、彼が伝染病の発生に気付くための情報や、薬を作るために必要な情報を、なんとか彼も発見してくれた。
後は、実際に伝染病が発生した時、なるべく初期の段階で気付いてもらえればいい。
いざ患者を目の前にすれば、多少症状に違いがあっても新種の伝染病だとわかるだろう。
私は新種の伝染病が発生するであろう地域に「たまたま」空き家を見つけ、父上に頼んで王立の診療所にしてもらった。もちろんそこで働くのは、私が招いた例の医師だ。
そして私は病が流行する時期までにすべての準備を整え、後は経過観察をするだけとなった。
ここまでやっておいてなんだけど、正直この時にはバーティア嬢の言う未来について、まだ二割程度しか信じていなかった。
ただ、恐ろしい伝染病が蔓延する可能性があるのなら、備えておいたほうがいい。別に邪魔になるものでもないしね。それに今回の件を通して私自身も学ぶことが多かったから、それだけで満足している。
だから、お忍びで診療所を訪ねた際、例の病の初期段階らしい患者を見つけた時には驚いたものだ。

本当にこんなことってあるんだなぁってね。
とはいえ、もうすべての準備が整っていたから、特に焦ることはない。
新種の伝染病に気付いた医師は、本当にいい働きをしてくれた。
もちろん、私も「たまたま」趣味で育てていた大量のルオナ草を提供させてもらった。
こうして、物事は私の書いた台本通りに進んだ。
それが今から二、三ヶ月くらい前のことである。
「ちょ、ちょ、ちょっと待ってくださいませ！　色々とおかしいですわ!!」
私が話し終えたところで、バーティア嬢が頭を抱えながら叫んだ。
「そう？　どこがおかしいのかな？」
物事は私の思い描いた通りに進んだし、たいしておかしいことはないと思うんだけどな？
あ、ちなみに、実際に伝染病が発生するまでバーティア嬢の話をあまり信じてなかったことは、もちろん内緒だ。
わざわざ馬鹿正直に真実を話して、私の評価を下げる必要はないだろう。
「な、な、なんで、殿下がそのようなことを!?」
「私は、君に協力すると言わなかったかな？」
「言ってくださいましたわ。でも……」
彼女はこうなるとはまったく想定していなかったようだ。

「私は自分の婚約者が不安がっているのに、無視するつもりはないよ。それに、自分の義母になってくださる方が亡くなる可能性があるのに、見過ごすわけがない。……私が少し頑張るだけでなんとかできるなら、余計にね」
「……それ、絶対に『少し』ではありませんわ。普通の十一歳の子供には、決してできないことだと思いますの」
バーティア嬢が、素直に喜んでいいのかわからないというような、複雑そうな顔で私を見る。
「ん？　私はもうすぐ十二歳になるよ？」
「十二歳でもですわ！」
「まぁ、普通の十二歳には無理だろう。でも、ほら、私は王太子だからね。それなりの教養は身に付けているし、王宮の書庫をある程度自由に使用することもできる。あぁ、それに父上の許可さえ得れば、優秀な専門家の力を借りることも可能だしね」
今回の件では少々「たまたま」が続きすぎたから、父上にはちょっと怪しまれてしまった。けれど『偶然です』と笑顔で押し切ったら、少し疲れた顔をしつつも深く追及しないでくださったし、よしとしようと思う。
「そ、そうなんですの？」
バーティア嬢は半信半疑なようだ。私はとりあえずニッコリと笑顔を向けておく。
私のうしろでは、今日も元気にゼノが首を横に振って「普通の王太子にはとても無理です」と呟いているけど、気にしないことにしておこう。
バーティア嬢も顎に手を当てて、何かをブツブツ呟きながら悩み始めた。
「こんなご都合主義、ありなのかしら？　なしでしょ!?　なしじゃないの!?　……いや、でも天才と名高く、『アンドロイド王子』の異名を持つこの方にとってはありなのかしら？　でもでも……」
……『アンドロイド』ってなんだろう？
今日もやっぱり、彼女の言うことは意味がわからない。
「まぁ、細かいことは気にしないで、ね？　ノーチェス侯爵夫人もご無事なようだし、民の被害も最小限で収まったんだから、それでいいじゃない」
「……そ、そうですわね！　お母様も王都の人たちも、伝染病の魔の手から逃れられたんですもの。よかったのですわよね」
色々な情報を一気に与えられすぎて許容量をオーバーしたのか、バーティア嬢が考えることを放棄した。
うん、私としてもそうしてもらったほうが助かる。
なぜそんなことができたのかと聞かれても、やってみたらできた――としか答えられないしね。
「そうだ、バーティア嬢。公的な誕生日プレゼントはパーティーで渡す予定なんだけど、それとは別にこれを……」
ベルベットが貼られた小さな箱を取り出し、まだちょっと引っかかりを感じている様子の彼女に

差し出す。
「な、なんですの？」
奥歯に何かが挟まったような顔をしていたバーティア嬢は、私が差し出した箱を警戒するように見つめる。
まだ何かサプライズがあるの!?　とでもいうような表情だ。
「私個人からの誕生日プレゼントだよ。私のお手製だから、たいした物ではないんだけどね」
そう言って箱を開け、中身を彼女に見せた。
「まぁ！　す、素敵ですわ!!」
晴れた夜空のような深い群青色をしたハート形の石に、銀の蔦が絡まった繊細なデザインのネックレス。
実際は「石」ではなくて、蔦模様のカットを施したガラス瓶に、群青色の液体を満たした物なんだけどね。
「これは、今回の伝染病の治療薬を作った時の、副産物なんだ」
「え？　治療薬の……？」
意味が理解できないのか、コテンと首を傾げるバーティア嬢。
「そうだよ。実はこれ、万能毒消し薬なんだ。ルオナ草について色々調べている内に、他の薬の効能を高める効果があることがわかってね。伝染病の治療薬は、ある薬草の効能をルオナ草で極限ま

で高めることで完成したんだ」
私の説明に、彼女がうんうんとうなずいてくれる。
でも、ちゃんと理解しているのかは謎だ。
「ただ、薬同士にも相性があるみたいで、ルオナ草によって薬効を高められるのは、限られた薬草だけだった。折角だから、もっと色々な薬に使えるようになればと思って、王宮の書庫を漁ってたんだ。そこでちょっと面白い本を見つけてね。その本に載っていた方法でルオナ草の成分を精製してみたら、あらゆる薬効を高められる特殊な薬ができたんだ。だからそれを使って、万能毒消し薬を作ってみたんだよ」
ちなみにその本は、禁書っぽい本が置いてある隠し部屋の中にあった。
書庫の構造上、違和感がある場所を探したら見つかった隠し扉。
その扉にはちょっと変わった鍵がついていて、いかにも開けてはいけませんという雰囲気だったから、つい開けてしまったのだ。
人って、ダメと言われたらついやりたくなる生き物だよね？　私のような「子供」は、特にそうだよね？
鍵は文字盤の数字を組み合わせ、特定の番号を作って解錠するタイプのもので、それは母上の誕生日だった。
きっと父上が、大好きな母上の誕生日なら忘れないと思って設定したんだろう。だけど、王妃の

誕生日なんて国民全員が知っているし、鍵にするには不向きな番号だと思うのは私だけかな？
そんなことを思い出していたら、バーティア嬢がポカンとした顔で言った。
「……は？　え？　万能毒消し薬？」
「そうだよ。このガラス瓶に入った群青色の液体が薬なんだ。いくつかの薬草から解毒成分だけを抽出して混ぜて、精製したルオナ草でその薬効を高めてみたんだ。効果は私が保証するよ」
私は王太子として毒への耐性を付けるため、微量の毒を定期的に呑んでいる。その時に、この万能毒消し薬を呑んでみたら、しっかり効いたのだ。こっそり毒の量を増やして試してみても、その効果は抜群だった。
もちろん、そんなことを人に言ったら間違いなく怒られるから、内緒だけれどね。
「私の妻になる君は、命を狙われる可能性があるからね。万が一にも君を失うことのないよう、お守りにと思って作ったんだ。受け取ってくれるよね？」
戸惑うバーティア嬢にニッコリと微笑みかける。そして箱の中のネックレスを手に取り、そっと彼女の細い首にかけた。
彼女の頬が一瞬で赤く染まる。
「うん、よく似合う」
「あ、ありがとう、ご、ございます」
バーティア嬢はリンゴのように真っ赤な顔でうつむきながらも、首にかかったネックレスを撫で

ている。そんな彼女を見て、私は大いに満足した。
実はこの薬は、なかなか面倒な代物なのだ。
新種の伝染病に対処するための仕込みを終えてから、興味本位でこれを作り始めたのだが、思いの外楽しくてやりすぎた。
精製したルオナ草の抽出液は、「組み合わせる薬草との相性」という制限が取り払われたことで、いい面と悪い面の両方ができてしまったのだ。
いい面はもちろん、混ぜればどんな薬の効果も増すことができること。
悪い面は……毒や麻薬などに混ぜると、物によっては最悪な毒薬ができてしまうことだ。
いい方向に使えば人を救う力になるけれど、悪い方向に使えばすさまじい暴力になる。
メリットとデメリットを天秤にかけて、私はこの薬を表舞台に出すのはやめた。
その代わり、私の妃として暗殺の危険に身を晒すことになるバーティア嬢への、誕生日プレゼントにすることにした。
この薬が、私の大切な婚約者殿（玩具）の盾となるように。
「バーティア嬢、このネックレスのことは、二人だけの秘密だよ？」
一応口止めはしておこうと思って、彼女の目をじっと見つめて言った。
この薬の存在が表に出れば、きっと面倒なことになる。……隠し部屋に入ったことも父上にバレてしまうかもしれない。

それに、逆に彼女を傷付けるために利用されてしまうかもしれないしね。
「お、お約束して差し上げますますですわ!!」
ん？　バーティア嬢、語尾がおかしなことになっているよ？
バーティア嬢は私があげたネックレスを両手で握りしめて、真っ赤な顔でうつむきフルフルと震えていた。
けれど、そのすぐ後に……
「セシル殿下！」
彼女は急に私の名前を呼んで、強い意志のこもった瞳を向けてきた。
「私、バーティア・イビル・ノーチェスは、殿下からいただいたこのネックレスに誓いますわ！このたびのご恩に報いるよう、しっかりとシナリオを修正し、立派な悪役令嬢になってみせると!!」
「……ん？」
「そのためにもまず、本来は悪の道に進むはずだったお父様を、立派な悪人にしてご覧にいれます!!」
「いや、それはいいかな？」
ノーチェス侯爵は宰相としてそれなりに優秀だから、悪の道に進まれるより国に奉仕してもらったほうがいいだろうし。

「遠慮なさらないでくださいませ！　殿下とヒロインがハッピーエンドを迎えるためですもの！　私、全力で悪役令嬢に徹しますわ!!」
「いや、遠慮はしてないよ？」
「見ていてくださいませ。わがノーチェス侯爵家は、見事に没落への道を歩んでみせますわ！」
「……」
うん、私の話はほとんど聞いていない感じだね。
困ったな。
でも、まぁノーチェス侯爵はそう簡単に彼女の企みには乗らないだろうし、放っておいてもいいか。
……面白そうだし。
もし、まずいことになりそうなら、その時に止めればいいよね？
わけのわからない誓いを立て、キラキラした目で見つめてくる彼女を、私は笑顔でスルーした。

立ち読みサンプル
はここまで

四　バーティア十一歳

「殿下、遂にこの日がきましたわ！」
純白のドレスを身にまとい、深紅の髪に淡い黄色のバラを添えたバーティア嬢が、胸の前で拳を握りしめる。
その胸元には、私が去年プレゼントした群青色のネックレスが輝いており、それを彩るように、いくつも宝石の連なった華奢なチェーンが重ね付けされていた。
先日十一歳の誕生日を迎えた彼女は、いつにも増して美しく着飾っている。
今日は、新たに社交界に加わる若者を祝う、王家主催のパーティーがあるのだ。
それに出席することで、私たちも遂に社交界の仲間入りを果たすことになる。
控え室には、今は私とバーティア嬢の二人だけ。
いや、正確には彼女の侍女たちとゼノが部屋の隅に控えているんだけど、気配を消してくれているから、二人きりと言っても問題ないだろう。
「そのドレス、よく似合ってるね。とても綺麗だよ」
「ありがとうございます。殿下も純白の騎士服がとてもお似合いですわ！　それが正装なのですわ